試行プログラムの事例報告

『社会認識形成を支援する映像メディア教材の開発と構想』

報告者　　准教授　　草原　　和博
社会系コース　Ｍ２　　佐々木　美緒
社会系コース　Ｍ２　　鳥井　千寿子

佐々木　これより上村をはじめ11名で取り組んできた、「社会認識形成を支援する映像メディア教材の開発と試行」について報告します。発表を務めます鳥井と佐々木です。よろしくお願いします。

本発表では、まず本研究でどんなことをしてきたのか、次に、なぜ映像メディア教材の開発と試行を行ってきたのか、最後に、研究を通して何を学んだのかについて、述べてまいります。

本研究のテーマは、科学的な社会認識形成を支援する映像教材を開発するというものです。ここで言う科学的な社会認識とは、「なぜ」や「何」という疑問を探求することを通して、社会的事象の本質や因果について仮説をつくったり、それを修正し応用していくことです。

また、今回作成した映像メディア教材には、二つのエッセンスが組み込まれています。まず一つ目は、探求のきっかけとなるような事象、素材。二つ目は、子供が仮説をつくったり、それを修正、応用していく思考のプロセスが組み込まれています。

それでは、本研究でどのようなことを行ったのかを述べていきます。48ページからの資料1をごらんください。資料は水色の帯がついている方の別冊資料です。

ご覧のとおり、今回は六つの映像メディア教材を開発いたしました。「特産品って何だろう？」では、経済学的視点から、特産品って何だろう、どうして特産品が生まれてくるのだろうという問いに答える教材を開発しました。「橋ができるとは」では、地理学的視点から、インフラの整備、とくに交通体系の変化は地域にどのような影響をもたらすのかという問いに答えていく教材を開発しました。「新聞の役割」では、社会学的視点から、新聞によって伝え方に違いがあるのはなぜか、情報とは何かの問いに答えていく教材を開発しました。「裁判って何だろう？」では、法学的視点から、罪と罰の決め方とその決め方の変化、つまり、裁判員制度とはどのようなものかを理解する教材を開発しました。「巡礼って何だろう？」では、歴史学的視点から、お遍路の今と昔を捉えさせるとともに、歩く人々や目的がどのように変化しているかを追求させる教材を開発しました。そして「藍づくりがもたらしたもの」でも、歴史学的視点から、なぜ食べることのできない藍をつくり始めたかの、藍づくりが広まった結果、地域の生活がどのように変化したのかを見

ていく教材を開発しました。

それでは実際に作成した、「特産品って何だろう？」と「明石海峡大橋が変えたもの」の２作品の一部をごらんください。

（「特産品って何だろう？」のワンシーン開始）

○徳島ナルト　こんにちは。徳島ナルトです。

○板野アイコ　こんにちは。板野アイコです。

○徳島ナルト　僕たち、徳島県の特産品を紹介したパンフレットをつくりたいんだ。特産品って聞いたことある。

○板野アイコ　知ってるよ、有名なもののことでしょう。

○徳島アイコ　徳島県で有名なものか。

○板野アイコ　スダチ、かずら橋、鳴門金時、阿波踊り、これをパンフレットに載せたらいいんだよ。

○徳島ナルト　本当にそうかな、何か違うような気がするな。

○亀太郎　何だかお困りのようだね、僕たちも協力するよ。

○先　生　ナルト君、アイコちゃん、さあ、これからみんなで、特産品ってどんなものをいうのか見ていこう。

○板野アイコ　はい。

○徳島ナルト　よろしくお願いします。

（「明石海峡大橋が変えたもの」のワンシーン開始）

○先　生　これは観光客の人数をあらわしたグラフです。徳子ちゃんの予想は当たっていたかな。

○徳島ナルト　日帰りの人はやっぱりふえているね。

○板野アイコ　でも、あれ、泊まっているお客さんは、それほどふえていないわ。

○徳島ナルト　本当だ、どうして。

○先　生　橋で徳島県と近畿がつながったことで、近畿の人にとって、徳島県が、来て観光して帰るが、１日でできる土地になったんだ。

○板野アイコ　それで日帰りのお客さんはふえたのに、泊まってくれるお客さんは余りふえなかったんだね。

○徳島ナルト　だから赤池さんたちは、泊まってくれるお客さんをふやそうと努力しているのか。

○先　生　それに徳島県の観光地へ寄らず、直接ほかの県に行く人もふえたのよ。

○板野アイコ　つまり徳島県が日帰りの観光地になってしまっているんだね。

（映像終了）

佐々木　次に、研究成果、ここでは試行実践について述べていきます。50ページ資料2をごらんください。今回、教材の活用に協力いただいた学校は３校です。まず徳島県内の都市部にある大規模校として津田小学校、次に、徳島県内の農村部にある小規模校として木岐小学校、そして県外大都市部郊外にある豊中市立寺内小学校の、環境・規模が異なる３校で実践を行いました。なお、協力してくださった各学校の先生方はいずれも本学出身で、「教育実践研究」の趣旨をよく理解していただいている先生方です。

また、担当学年の異なる先生方に協力していただけたことで、同じ教材を、学年段階を変えて試行し、子どもの理解のし方や教師の活用法の違いを探ることができました。例えば、藍づくりの映像メディア教材は、３学年と５学年で実践してみました。新聞の映像メディア教材は、３・４・５学年のすべてで実践することができました。

また、これらの映像メディア教材は、単に子どもに見せて終わりではありません。教育内容と地域の素材を関連づけることで、数時間単位の小単元をつくり、学習の深化・発展を図ることもしました。例を挙げると、津田小学校では、「特産品って何だろう？」の教材を活用して、「これぞ徳島市の特産品を探せ」という７時間の小単元学習へ展開することができましたし、木岐小学校では、「明石海峡大橋が変えたもの」の視聴を踏まえて、「日和佐道路の開通が変えたもの」を考える学習へと発展させることができました。51ページからの資料3、資料4、資料5は、三つの協力校で、メディア教材と地域素材を関連づけて行った実践の指導案です。あわせてご覧ください。

ここまでは実践の成果を紹介してきました。ここからは、なぜメディア教材を開発したのか、そのねらいについて述べていきます。

まず、映像メディア教材の開発と試行を通して、社会科教員に求められる科学的な社会の見方・考え方を育てる授業構成力を養うことが挙げられます。先生方の話によると、内容構成と学習過程に関する理論を理解し、その理論に基づいて教材を開発したり、その教材を用いて複数の授業モデルを開発したり、提案できることを目指されたそうです。

そして二つ目に、協力校の先生方とともに授業を実践し、反省する過程で、教員に求められる「分かる授業」「おもしろい授業」を展開できる技術・能力を育てることもねらいとされていたそうです。協力校の先生方の授業を観察したり、事後に話し合いをもったりすることで、適切な発問や資料提示のタイミングや方法、また子どもにわかりやすい表現など、実際の授業展開に求められる力量を目の前で学ぶことができました。

これらのねらいを達成するために、私たちは６月から３月まで、大きく分けて３期間で研究を進めてきました。第１期は教材研究期、第２期は教材開発期、そして第３期は教材試行期です。詳しくは、パワーポイントの画面をご覧ください。なお、協力校の先生方とは、第２期から第３期にかけて、ウエブ上で頻繁に情報交換し、メディア教材やワークシートなどを作成しました。協力校の先生方とは距離は離れていても、インターネットを使えば、情報を共有したり、考えていることを交流することは簡単です。ウエブ上でのディスカッションの様子は、66ページからの資料6にあります。ごらんください。

では、協力校の先生方は、今回の研究の意義をどう感じておられるのでしょうか。映像をご覧ください。

（映像開始）

〇津田小学校教諭　教材を深く追求して、理論的に構造的につくっていくと、子どもの目も輝くなと、とても感じました。院生さんと関わらせていただいて、いかに授業と教材を深く追求し、理論的に組み立てていくことが大切かを強く学びました。

〇寺内小学校教諭　自分では絶対に用意できないような手の込んだ教材というのは、すごく子ど

もも食いつきがいいです。なかなか業務の合間を縫って、そこまでの教材を用意することができないので、今回は希望に添った教材を用意してくださったので助かりました。なかなかふだん会えないテーマに出会うことができたかなと思って、例えば、大阪の身近なことだけじゃなくて、５年生６年生ってなってくると、地域を離れて、より広い視野から地域を捉える指導というのが必要になってくるかなと思います。それにぴったり合った教材だったかなと思っています。

○木岐小学校教諭　どのような言葉の言い回しとかグラフの見せ方をすれば、子どもによく伝わるのかとかいうのを、考えるきっかけになりました。院生さんと一緒に考えながら、こういった表現は分かりにくいんじゃないか、こうすれば分かりやすいのではないか、そういったことを話し合うことができ、自分にとって大変勉強になったと思います。

○木岐小学校校長　院生さんたちと、うちの担任が話をしたりして、違った立場で子どもたちを見ることができた、これが第一番の成果だと思います。

（映像終了）

佐々木　私たち大学院生が感じた今回の学習の意義は、自分たち自身で取材・調査したことにもとづいて映像メディア教材を作ったり、自分たちで作った教材を活用した授業実践のサポートに入ったりすることで、授業理論についての理解が深まったこと、また教科教育と各学問のつながりをつくっていく必要性を実感したことでした。

また、協力校の先生方から実践の前後に指導していただく過程で、子どもの腑に落ちる表現をすることの難しさ、地域や生活の実態を踏まえた授業づくりの大切さを、リアルに体験を通じて学ぶことができました。そして、実践を通して見えてきたものは、同じ教材でも子どもの学年が違えば理解も異なること、そして同じ教材でも、教員によって解釈や教え方が異なり、例えば、映像を止めながら繰り返し問いを投げかけ、答えを映像で検証していくタイプの授業と、映像を一通り見せて、後から内容を吟味し理解を定着させていくタイプなど、授業の作り方には、教師の指導観や子どもの実態に応じて多様な選択肢があることが、ことばではなく経験として納得できました。

このように、大学で学んだことを教育現場で確かめたり、逆に大学の中だけでは気づかなかったことを教育現場で学ぶことができた「教育実践研究」でした。

以上で発表を終わります。